

アフリカの森 人間の行為で絶滅の危機



「進化の隣人」チンパンジー



チンパンジーの「笑顔」の写真も展示。
人間との親近感を感じさせてくれる



焼き畑や伐採など、チンパンジーのすむ環境を育む
原因となる人間の行為を紹介したコーナー

会場では林原類人猿研究センターが制作したビデオも上映。伐採された木は、日本でもティッシュペーパーや紙に加工し使われていることが紹介され、「今ならまだ間に合う。第一歩を踏みだし、誰かに伝えてみませんか」とのメッセージを伝えている。

「人間に近い存在であるチンパンジーが、人間の行為のために減っている。その原因は環境問題に行き着き、影響は私たち人間にも降りかかっている」と秋山さん。「見た人には、自分たちに何が出来るか、日々の生活をどう過ごすかが絶滅するか否かの鍵を握っているということを考えてほしい。そしてチンパンジーのことをきっかけに、まず家族や友人に話してほしいですね」と語った。

同展は今月29日まで(日曜・祝日休館)。問い合わせはアスエコ(086-224-7272)。

人間に最も近いといわれ、「進化の隣人」とも表現されるチンパンジー。しかしアフリカの森は人間の行為で環境が悪化し、チンパンジーは絶滅の危機に瀕している。チンパンジーの暮らしや生態、そして生息環境を脅かす原因を紹介する「ようこそ！ チンパンジーの世界へ」展が、北区下石井の環境学習センター「アスエコ」で開かれている。展示から見えてくるものとは――。【江見洋】



チンパンジーの暮らしを紹介する「ようこそ！ チンパンジーの世界へ」展
—写真はいずれも北区下石井の環境学習センター「アスエコ」で

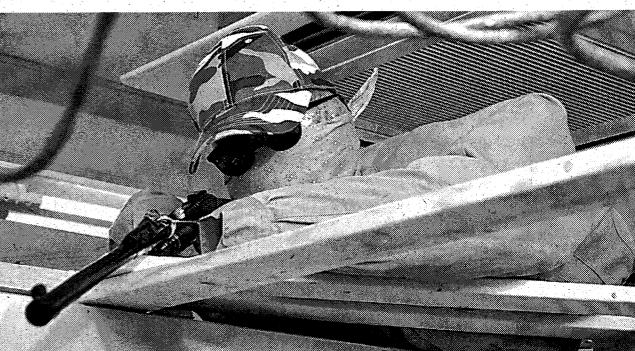
アスエコ 生態や環境脅かす原因紹介 29日まで

同展には、今月31日で閉鎖される林原類人猿研究センター(玉野市)が協力している。同センターによると、チンパンジーと人間は700万年前まで同じ生物だったといい、DNAの差はわずか1・23%といわれている。しかし人間による環境の変化などで、地球上の野生チンパンジーの数は現在10万頭ほどしかいないという。

最初のブースでは、チンパンジーたちが暮らすアフリカの森を再現。造花の葉が四方を囲み、うつそうとした雰囲気だ。えさとなる果実のレプリカも、葉の間から顔をのぞかせている。またチンパンジーが木の枝で毎日作る「ベッド」もあり、実際に寝心地を体験できる。さらにアリ塚の穴に木の枝を差し込んで好物のアリを取る「アリ釣り」も模型で疑似体験できる。

一方、同ブースでは、チンパンジーが感情を持っていることも紹介。4頭の「笑顔」の写真や、驚いた時の鳴き声も聞くことができる。展示を担当したアスエコの秋山沙織さん(30)は「最初にチンパンジーと一緒にヒトとの『近さ』を体験してもらい、親近感を持つてもらえるような展示です」と話す。ところが「これもチンパンジーの森林の現実です」と入り口に書かれた次のベースに入ると、雰囲気は一変。焼き畑や伐採された森の写真が左右の壁一面

に展示されている。危険を察した際に出すチンパンジーの声が流れ、密猟者の人形が頭上から銃口を向けている。同ブースではチンパンジーの生存を脅かす原因について解説。伐採は木の人形が頭上から銃口を向けている。外国人に売るためで、森の減少のほか木を運搬する道が造られたため事故や密猟に遭う危険性が高まった。紛争も原因の一つで、逃げてきた人たちが森を焼き畑にしたり、チンパンジーが兵士の食料にされているという。またパソコンや携帯電話に使われる鉱物を掘るために鉱山開発や、森に入った人間にによる感染症でも危険にさらされている。



人間の行為による問題を紹介するコーナーの頭上には、「密猟者」の姿も